

無相の相

張政遠（東京大学大学院総合文化研究科）

西田幾多郎（1870-1945）は『働くものから見るものへ』（1927年）の序に、「幾千年来我らの祖先を孕み来った東洋文化の根柢には、形なきものの形を見、声なきものの声を聞くといったようなものが潜んでいるのではなかろうか」と書いている。「形なきものの形」や「声なきものの声」、「無形の形」、「無声の声」または「無相の相」といった表現は、仏教に由来する。「形」と「相」つまり form というものに対して、その否定は「無形」と「無相」つまり formless である。そこから、「無形の形」と「無相の相」つまり formless form というものも考えられるが、formless form を見るということは一体何を意味するのだろうか。

2024年8月16日(金)から9月15日(日)に石川県西田幾多郎記念哲学館にて「無相の相——張燦輝写真篆刻展」が開催される。張燦輝は香港出身の哲学者であり、専門はハイデガーの哲学であるが、写真と篆刻の作品も多く制作している。中国語では、photography は一般的に「撮影」と訳されているが、張の現象学的写真論によれば、それは決して「影」を撮る（あるいは「真」を写す）というリアリズム的なことではなく、むしろ「相」を撮ることであるという。広東語では、写真を撮ることは「映相」というが、張は「撮相」という言葉を作り、本来見えない「無相の相」が「撮相」することによって見えるようになるという。「無相の相」は、formless form という意味だけではなく、photography of formless form という意味もある。

「無相の相」という写真篆刻展のうち、「大地の相(Terra Phenomena)」・「死の昇華(Sublimatio Mortis)」、「書印の美(Nishida calligraphy in Seal)」、「梟画印(Owl in Painting and Seal)」という4部に分かれている。「大地の相」は、大地(terra)の風景についてである。しかし、これは一般的な風景写真ではなく、張燦輝が飛行機の窓から撮った写真である。3万フィート以上の高度から見た大地には、普段見えない姿や表情が見えてくるのである。私は、これが「無相の相」の第一の可能性、すなわち形なき大地を見ながら、今まで見たことのないような大地の形を見ることであると解釈したい。

「死の昇華」は、ミラノにある墓地で撮られたお墓の彫刻の写真である。「メメント・モリ」というラテン語の言葉の通り、脆いものである人間は必ず死ぬということを決して忘れてはならないが、しかし形のある彫刻によって、形なき死における崇高なものが見事に表現されていると捉えることができる。私は、これが「無相の相」の第二の可能性、つまり形ある彫刻を見ながら、死という形なきものの形を見ることであると解釈したい。

「書印の美」は、西田幾多郎が書いた書に、張燦輝が彫った篆刻の印が加わった作品である。西田幾多郎は「書の美」の中で、「...絵画や彫刻の如きものはいうまでもなく、音楽の如きものであっても、客観的制約が多いと思う。然るに書に至っては、それが極めて少なく、筋肉感覚を通して、簡単なる線とか点とかより成る字形によって、自由に自己の生命の躍動を表現するのである」と書いているが、篆刻もまた書と同じように、リズムを表現する芸術だと言えよう。私は、これが「無相の相」の第三の可能性、簡単な形(点・線)を通じて、無限の形(リズム)を見ることとして解釈したい。

西田哲学会第 22 回年次大会 パネル発表Ⅱ①

最後に「梟の画印」であるが、それはマレーシア出身の画家・版画家、劉欽棟が描いた梟の絵に、張燦輝が彫った篆刻の印が加わった作品である。絵画は書より形（点・線・面）が豊かであるが、絵画の対象が梟、西洋では知恵の象徴でありながらも、東洋では死の象徴またはあの世の案内者という意味もある。私は、これが「無相の相」の第四の可能性、（つまり）簡単な形（点・線・面）を通じて、無限の形（知恵と死）を見ることとして解釈したい。